

現代スポーツを考える — 野球の Un Written Rules について —

岡 部 修 一

奈良産業大学地域公共学総合研究所

Essay of the Present-day Sport — The Unwritten Rules on Baseball —

Shuichi Okabe

Research institute of Public Affairs, Nara Sangyo University

競技スポーツでの試合は、厳格で公正なルールに基づいて行われ勝敗を決している。その根幹を成すルールは、起こりうるあらゆる事象について「All or Nothing」的にはっきり白黒つけられるよう、明文化されている。それゆえルールとは現実の試合において、審判や選手たちが判断に迷うような曖昧で抽象的、観念的なものであってはならない。そして技術や戦術の進歩、高度化に応じて追加や改正の措置がとられるなどして、ルール自体は変化していく。

しかしプロ野球界には、明文化されてはいないが、極めて大きな影響力をもつ「Unwritten Rules (Unwritten Code)」が存在する。元々はアメリカの大リーグ野球 (Major League Baseball 以下 MLB) において伝統的に受け継がれ、日本では「不文律」「暗黙の了解」「紳士協定」などとして知られている。この時に現場を混乱させたり、観る者にフェアプレー精神との矛盾を感じさせたりする「Unwritten Rules」について考察する。

キーワード：Unwritten Rules、フェアプレー、野球

1. はじめに

MLBにおける「Unwritten Rules」とは、野球規則には書かれていないが、選手として守るべき掟、またはエチケットのような概念とされる。そういった概念は、18世紀以降の近代社会形成過程で発展したと考えられ、政府の議員や軍隊士官、上流階級が属するクラブ会員といった主に特権階級の男性コミュニティにおいて、一人前の男が遵守すべき規範と慣習として継承されてきた。日本でいえば義侠心が近い概念かもしれない。そして特権階級の男性向けレジャーであったスポーツ界にも「Unwritten Rules」は持ち込まれ、MLBの歴史の中で脈々と生きてきたのである。

そもそも「Unwritten Rules」の概念は、プライドや面子を重視し、侮辱されることを最も嫌忌しており。いわば男の独善的論理に基づいているともいえる。そしてMLBで構築されてきた「Unwritten Rules」は、対戦相手への敬意を強く求めている。試合において、優勢な側が高にかかって攻めたてるような戦い方は、劣勢側の相手を必要以上に貶め恥ずかしめ、尊厳を踏みにじる行為として忌避しようとしている。日本の諺にある「完膚なきまでに叩く」というのは「死者に鞭打つ」行為にも等しく「武士の情け」のような敗者への心づかいこそが、一人前の男としてあるべき姿と考えているようだ。このように聞けば「Unwritten Rules」には、フェアプレー精神やスポーツマンシップに合致する崇高な概念で正当性があるように思えるが、現実にはほど遠い稚拙な騒動や混乱などの問題が起こっている。

「Unwritten Rules」のもうひとつの側面として、勝敗の趨勢がすでに決したような状況で記録の乱造を防ごうとする意味合いもあるとされる。例えば攻撃側が大差でリードする終盤での盗塁は、失意に満ちた守備側が盗塁阻止への集中力や意欲が欠如しているため、記録として無意味というわけだ。ただし、これでは大差をつけられた側が戦う意欲や気持ちを無くすことを暗に認め、故意の敗退行為をも認めることになるのではないかとの批判もある。

そして「Unwritten Rules」の概念は日本へも波及した。あからさまな報復行為こそみられないが、日本のプロ野球（Nippon Professional Baseball 以下 NPB）でも物議を醸す事例が起きている。

2. 「Unwritten Rules」の現状

2.1 認知された「Unwritten Rules」

かつて日本にとってMLBは遠い世界の未知の野球であった。しかし1995年、当時NPBを代表する投手であった野茂英雄が渡米してMLB入りし、ノーヒットノーラン達成やオールスター戦出場を果たすなど大活躍する。野茂によって道が開けて以降、多くの日本人NPB選手が移籍し、イチロー、松井秀喜、黒田正樹、上原浩治、ダルビッシュ有らが、MLBで堂々とした実績をあげ存在感を示している。現在は彼らのニュースが連日報道されることで、MLBは日本でも極めて身近な存在となった。さまざまな情報が入手できるようになった中で「Unwritten Rules」の概念も認知されるに至ったというわけだ。

よく知られているのは、5点以上リードしているような場合、6回以降の攻撃で盗塁、送りバント（犠打）、セーフティバントをしてはならないし、3ボール0ストライクのボールカウントから打ってはいけないというもので、要は得点差を広げるような作戦をとってはならないということだ。

また投手が完全試合や無安打無得点の投球を続けている試合終盤に、バントヒットで阻止を狙ってはならないとされ、これは偉大な記録の可能性をバントで防ごうとするのは卑怯ということか。

そして本塁打を打った打者が、大げさでこれ見よがしなガッツポーズをしたり、わざとゆっくりとダイヤモンドを回るなどの行為は、投手への挑発、示威行為とされる。

「Unwritten Rules」の掟破りの報復行為でよく知られているのは「故意死球」いわゆるビーンボールである。頭は狙わないとの「Unwritten Rules」もあるようだが、体にぶついたり、打者の背中側にボールを通過させたりする。これら報復行為について、当事者（投手）はじめ関係者（チームのスタッフ、

選手)らは表向き一様に否定するが、現実的には行われていることを、選手のみならず監督やチームスタッフ、オーナーなどの経営陣、審判員そして観客と、MLBに関わる人々は承知している

その他の「Unwritten Rules」について、下記に主なものをあげる²⁾。

- 併殺打を防ぐなどの目的で危険なスライディングをしてはいけない。
- 連続本塁打後の初球を打ちに行ってはならない。
- 死球を受けてもその箇所をさすって派手に痛がってはいけない。
- 走者はアウトになってダグアウトに戻る際、近いからといってマウンドを横切ってはならない。
- 打者が打席に入る際、球審や捕手の前を横切ってはいけない。
- 捕手のサインを盗み見してはいけない。また二塁走者が打者にサインを教えることもいけない。
- 投手は三振を奪ったときや、スリーアウトを取ったときに過度にガッツポーズをしてはいけない。
- ボールカウントが3ボール0ストライクになったときには直球を投げる。
- ボールカウントが0ボール2ストライクになったときには次の1球はボール球を投げる。
- 選手はストライク・ボールについての自分の判断を審判に告げてはならない。
- 相手チームの選手が友人でも、試合中は親しげにしてはいけない。
- 試合の結果に関して、相手チームや観客の前で過剰に騒いではいけない。
- 乱闘が起きた際は、ベンチやブルペンを出て(制止行動も含めて)乱闘に参加しなければいけない。
- 乱闘の際、バットやボール、ヘルメットなどを投げつけたたり、強く殴ったり蹴ったりして選手生命を危うくするような行為はしてはならない。

相手への敬意に関する内容、危険な行為や卑怯な戦術、無礼な振る舞いを禁じる内容、仲間意識や絆を重んじる内容など、実に多くの不文律が存在する。スポーツ選手あるいは人としての倫理観を求めることは野球に限ったことではないが、仲間思いの行動を求めるのは忠誠心や団結力の発露を示し、いかにもアメリカらしい。

このように「Unwritten Rules」にはさまざまな決め事があるわけだが、あまりに「Unwritten Rules」にとらわれ過ぎると、プレーが窮屈にならないだろうか。他のスポーツでは、ここまで細かなルール外の決め事はない。野球は他のスポーツに比べると、試合時間の中に多くの間(インターバル)が存在しており、投手の投球から始まるプレースタイルでは、投球一球ごとに投手ははじめ野手、さらには攻撃側の打者、走者も含め、フィールド内すべての選手が、次のプレーに対する作戦や指示に基づいた意思や意図を込めることが可能である。すなわち他のスポーツに比べて、試合中に人間の考えや狙いが反映されやすい野球では「Unwritten Rules」によって、できる限り怒りやいらだちの感情を抑制する必要があるのかもしれない。

2.2 「Unwritten Rules」をめぐる騒動

「Unwritten Rules」をめぐる騒動の実例をあげてみよう。

- 2001年、メッツの新庄剛志が11-3と大差でリードしたマーリンズ戦で、ボールカウント3ボール0ストライクから本塁打を打ち、その翌日に足に死球を受けた。またこの件以外にも、本塁打直後バットを高々と放り投げる行為が挑発的とされ、新庄は故意死球を誘発した。

• 2001年5月、ダイヤモンドバックスの投手カート・シリングは8回1アウトまで完全試合を続けていた。ここでパドレスのベン・デービスがセーフティ・バントの内野安打で出塁、完全試合を阻止した。このときデービスに対してはダイヤモンドバックスベンチから強烈な罵声が浴びせられ、当時監督のボブ・ブレンリーも「卑怯者」呼ばわりで強く批難した。ただし、投手の無安打無得点試合の可能性を試合終盤にバントヒットで阻止しようとしてはならないとの「Unwritten Rules」には背くものの、2-0の試合状況を考えれば、デービスのプレーの正当性を擁護する声も多かった²⁾。

• 2009年9月、ブリュワーズのプリンス・フィルダーがジャイアンツ戦でサヨナラ本塁打の後、本塁上で味方ナインをボウリングのピンのように一斉に仰向けにひっくり返らせる派手なパフォーマンスを行った。これが「ホームランですでに打ちのめされた相手に追い打ちをかける傲慢な行為」とみなされ、翌2010年3月のオープン戦でジャイアンツのバリー・ジト投手からフィルダーは報復死球を受けた²⁾。

• 2011年7月のタイガース対エンゼルス戦は、まるで「Unwritten Rules」の応酬のような試合となった。3回に本塁打を放ったタイガースのオールドネスは、左翼ポール間際の打球がフェアかファウルか見極めるためすぐには走塁を始めず、これをエンゼルス投手ウィーバーが侮辱的行為と感じ、激怒する態度をタイガースベンチに見せつけた。これを受けて、オールドネスは6回裏センター・フライに倒れベンチに戻る際、ウィーバーへ侮蔑的な言葉をつぶやいた。さらに7回裏2死タイガースのカルロス・ギーエンは本塁打直後、ウィーバーを睨みつけながら数秒間ゆっくりとサイドステップして一塁へ向かった。この明らかな挑発行為によって球場中に不穏で異様な空気が流れ、主審は両チームに警告を発した。しかしウィーバーは次打者への初球を打者の頭上に投じ、主審は危険球としてウィーバーおよびマイク・ソーシア監督に退場を宣告した。降板の際もウィーバーはタイガースベンチめがけて怒りを爆発させ悪態をついていたという。明白な挑発行為を行ったギーエンは「どんな打者もポール際の打球はフェアかファウルを見極めるため立ち止まっている。それなのにウィーバーは『走塁しろよ!』と叫んでいた。自分もこの世界で長年やっている。敬意を払う選手には自分も敬意を払うが、そうでない選手には敬意を払う必要はない」と、ウィーバーが先に敬意を失する行為をしたからだとする正当性を主張した。この試合の騒動はこれに止まらず、8回表までノーヒット・ノーラン投球を続けていたタイガース投手バーランダーに対して、エンゼルス先頭打者エリック・アイバーは初球をセーフティ・バントした。守備で暴投し記録上は失策での出塁となったが、ノーヒットノーラン投球が続く終盤でのバントに、球場の空気は一瞬凍りつきファンからは一斉に大ブーイングが起こった。その後バーランダーは初被安打を含めて2点を失い、結局8回で降板した。セーフティ・バント出塁後、1点目のホームを踏んだアイバーに、タイガースベンチから「来年おぼえとけよ」との罵声が浴びせられた。試合後にバーランダーは「バントは驚いたが、3点差だし賛否両論の議論があっておかしくない。」と語り、ソーシアとジム・リーランド両チーム監督はじめ多くの野球関係者たちも、地区首位を争う両チームの状況と試合展開を考えれば正当なプレーと論評した¹⁾。

次にNPBでの事例をあげる。

• 2001年5月の巨人対ヤクルト戦でヤクルトの投手藤井秀悟が8-1と大量リードの9回表2死3塁の場面、ショートゴロで全力疾走、これが「自軍の大量リードの場面で、投手は打ってはならない」という「Unwritten Rules」を破ったとして、9回裏のマウンドに上がった藤井は巨人ベンチから厳しい

ヤジを浴び、藤井投手は涙を流し動揺して連続死四球を与えて降板してしまった。

• 2010年4月、西武の涌井秀章から本塁打を打ったロッテの神戸拓光は、喜びのあまりガッツポーズを連発、さらにベンチ前で「M字開脚」のようなポーズをとり、次の打席で死球を受けた。

• 2010年6月、阪神の藤川俊介は5点差リードの7回に盗塁、これに対してオリックス・バファローズ監督岡田彰布が「5点差でな…。あれは大変なことをやってしまったな。こっちは負けを認めているのに…」さらに「あしたも試合があるのにな」と発言した。ただし藤川の盗塁は、守備側のオリックスが盗塁阻止のプレーを行わなかったため、公式記録上は「守備側の無関心による進塁」となっている。

さらに今春開催された第3回 WBC (World Baseball Classic) でも、次のような事例が起きた。

• 2013年3月9日、WBC 第1ラウンドD組のメキシコ対カナダ戦において、カナダ6点リードの9回表の攻撃で、クリス・ロビンソンがセーフティバントで出塁した。大差のついた9回にバントで出塁されたメキシコの投手アーノルド・レオンは、「Unwritten Rules」の掟破りへの報復行為のように、カナダの次打者に対して執拗な内角攻めを行い、主審の警告試合宣言も実らず死球を与えた。この直後、メキシコ、カナダ両チーム入り乱れて大乱闘となり、最終的に7名が退場処分となる WBC 史上初の暴力行為事件が起こった。

3. フェアプレー精神と「Unwritten Rules」の関係

3.1 「Un Written Rules」は強要するものか

「Unwritten Rules」をめぐる騒動を第三者として冷静に考えてみる。相手のプライド、誇りを傷つけることなく敬意を払うといった大義名分はあるのだろうが、それにしてもあまりに子どものケンカに等しい稚拙な紛争が多いように感じる。ただ単にストレスやフラストレーションのはけ口の言い訳にしているようにも思える。元来、スポーツとは選手個人のもつ体・技・心すべての能力を駆使して最高のパフォーマンスを発揮するものである。試合の中では劣勢に追い込まれば、心理面では大きなストレスやフラストレーションを感じる。しかし一流アスリートとはその揺れ動く心理を辛抱や忍耐でコントロールし立ち直ろうとするのだ。しかし MLB や MPB の「Unwritten Rules」騒動の中にはその辛抱や忍耐が足りないのではないかと感じるものが多い。投手や打者の挑発行為にしても、過度のはしゃぎ過ぎは問題だがあまり神経質になるのは、滑稽である。それならば現在 MLB、NPB のいずれでもチームがサヨナラ勝ちした際、打点をあげヒーローとなった選手を取り囲み、祝福のつもりであろうが殴る蹴るの行為、ユニフォームを剥ぐ行為、清涼飲料水などを大量にかける行為など、まさにグラウンド内で大はしゃぎするが、この行為にサヨナラ負けで敗れた相手に対する敬意や心遣いがあるといえるのだろうか。確か「Unwritten Rules」の中に「試合の結果に関して、相手チームや観客の前で過剰に騒いではいけない」とされているはずなのだが…。

時に過敏なほど敬意を求め掟破りには報復行為までしながら、時に敬意や心づかいの微塵も感じられない大はしゃぎを看過するのは、完全なる矛盾である。掟破りを許さないことと、敗者への思いやりのない狂喜、このいずれもが要するにどちらも感情のコントロールが出来ないに過ぎない。

とくに WBC での事件は本末転倒といえる。WBC の順位決定方式には「得失点差」の制度が導入されており、できるだけ多くの得点をあげることは、より順位をあげる可能性が高まる。勝っても負けてもまた新たな試合が続いていく長丁場のリーグ戦ではないのだ。このような順位決定方式の短期決戦において、「大差でリードしている場合6回以降にバントなどの戦術をとってはいけない」という「Unwritten Rules」を持ち込むこと自体がおかしい。6点リードの9回であろうとカナダがより多くの得点奪取のため、セーフティバントの戦術をとることは、十分理解できる、いや理解せねばならない。おそらくメキシコの選手たちは6点差で負けているイラつきをぶつけたに違いない。自分たちの追い詰められた心理のはけ口にするような「Unwritten Rules」の乱用、相手への強要はまったく見苦しい。それらは相手に対する敬意とはまったく別次元の話である。

アマチュア、プロフェッショナルを問わずトップレベルのスポーツ競技は、体力、技術、気力いずれも人間の限界能力に挑む戦いである。心理的なプレッシャーやストレスは計り知れない。しかしスポーツで最高のパフォーマンスを発揮するには、感情の高揚と抑制という相反する側面の両立が肝要で、興奮し高ぶった感情のままに行動することは、単に粗野で不作法、無法がはびこるケンカに成り下がってしまう。「Unwritten Rules」に名を借りてイライラやストレスを相手にぶつけ、短絡的な報復行為に及ぶのは、野球の価値をおとしめることになると選手たちは自覚すべきである。

3.2 「Un Written Rules」とフェアプレーの狭間

「Unwritten Rules」では、試合の終盤に大量リードしている側は、盗塁やセーフティーバントしてはならず、3ボールノーストライクから打ちにいてもいけないとされるが、「大量リードの終盤」というのは具体的にどのような状況を指すのだろうか。大量リードの一つの基準としては、満塁ホームランが出ても追いつかない「5点差以上」があろう。しかし5点差が本当に大量リードにあてはまるのか、あるいはその状況で戦意喪失とするならば、プロスポーツ選手としてあまりに情けないのではないだろうか。MLB や NPB における5点差というと決して安全圏のリードとは思えない。よくいわれるようにスポーツは筋書きのないドラマであり、野球でも何が起きるかわからない。何らかのきっかけで流れが変わり、相手の長短安打ばかりでなく四死球や失策が絡んでの大量得点もありうる。NPB でも、打者の技術向上が進み、飛ぶボール問題などもあって本塁打が出る状況になっている。5点差以上を逆転したケースも多い。

2011年4月13日の巨人×阪神戦、5回まで0-6とリードされた阪神はその後反撃し、9-7で勝利を収めた。

2011年6月2日のオリックス×中日戦、0-7でリードされたオリックスは8回裏に満塁ホームランなどで7-7の同点に追いつき、延長11回裏にスリーランホームランで10-7と勝利を収めた。

2013年8月20日阪神×DeNA戦では7-0とリードした阪神が中盤に追いつかれ、11-10で逆転負けを喫した。

このように終盤での大逆転劇があるからこそ、さらなる得点奪取をめざして中日は6点差でも8回にセーフティーバント、阪神も5点差の7回に盗塁を行ったのである。前述したオリックスの岡田監督の発言でいえば、6月2日に自チームが8回から7点差を逆転勝利した。それにもかかわらず2日後の6

月4日7回5点差つけられた相手チームの盗塁に激怒するというのは、思い通りならないことに苛立ち、怒り、八つ当たりというべき、大人げない対応、あまりに利己的な主張である。

大差のついた劣勢な状況で最後まであきらめないことと同様、大差でリードする優勢な状況でも、油断や隙を見れば逆転されることもあると、スポーツの指導者たちは最後まで全力を尽くすことを重視してきた。とりわけ日本独特のスポーツ文化である高校野球では「手を抜くのは相手に失礼にあたる」との概念もあって、常に後までの全力プレーを求めている。何が起きるかわからない勝負事では、点をとれるときに取っておくのは鉄則であり、点差を広げるチャンスをむざむざと放棄するような行為は、むしろ敗退行為にも等しいとして嫌忌している。これを高校生レベルの青臭い考えだと切り捨ててはならない。MLBやMPBの野球でも人気を支えるファンは、選手の全力プレーを望んでおり、「Unwritten Rules」に名を借りた手抜きプレーは望んでいないはずである。敬意や心づかいの「武士の情け」のような概念は、個人が秘かに抱くもので、大げさに喧伝したり相手に強要するものではない。本末転倒すれば、本当に真実を理解するファンから見放されることを知るべきである。

4. まとめ

MLBに「Unwritten Rules」が広がったのは、年間160試合以上、同じ相手とくり返し対戦するため、慣れ合いの感情が生まれたこと、さらに試合で広大なアメリカ本土中を煩雑に行き来するため、長時間の移動を強いられ、疲労軽減で少しでも楽をしたいという思いなどから、大差がついたような試合では、互いに手を抜く悪しき習慣が生まれたと考えられている。

日本では甲子園をめざす高校野球に野球の原点があり、その戦いは負ければ終わりのトーナメント方式であるため、大量得点差でもあくまで得点にこだわって確実に勝ちに行く精神、そして常に全力で取り組む指導方針が根付いている。したがって元来、MLBの「Unwritten Rules」のような手を抜く概念はなじまないといえる。

またWBCや五輪などの国際試合は、国のプライドと威信をかけた戦いであり、選手たちの勝利への執念や重圧は想像を絶するものといわれる。このような国際試合において1点や1試合の重みは極めて重要であって、点差をさらに広げるチャンスをむざむざと放棄するような行為はあり得ない。何点リードしようとさらに1点でも多く奪取したいという意識が強いはずである。

本来、勝負とはそうあるべきであり、勝敗の趨勢が決したと思える状況下でも、双方ともに手を抜いて試合をするようなべきではない。少年野球や高校野球、大学野球など、アマチュア野球は、ひたむきに全力を尽くして試合を成し遂げ、野球ファンはそのプレーぶりに魅了されるのだ。そうしたアマチュア野球の模範となるべきNPB、さらにその向こうに位置する世界最高レベルのMLBで「Unwritten Rules」を都合よく利用し、手抜きプレーや我慢や辛抱の欠如した感情的な行動が多発するのは、魅すべきプロフェッショナルとしてはあるまじきことではないだろうか。

サッカーの試合中、選手が負傷し倒れ込んだ場合には負傷者救護のため、いずれのチームがキープしていようとボールをフィールド外へ蹴り出し試合を中断させ、試合再開後に、蹴り出した相手にボール

を譲ることが習わしとなってきた。激しい接触プレーをともなうサッカーにあって、まさにフェアプレー精神の権化のような「Unwritten Rules」である。しかし、25年以上大学サッカーの指導に携わる監督によれば、昨今ピンチの場面で守備側が負傷を装って、蹴り出しを強制するなど、これを逆手にとって悪用されることも増えたため、現在では試合の中断はすべて主審の裁量権としたという。野球の「Unwritten Rules」は、相手への敬意や勝負に敗れ打ちひしがれている者への心づかいなど理解できる部分もあるが、それを強要や短絡的な報復行為というのは、ある種「Unwritten Rules」の悪用といえる。

「Unwritten Rules」の蔓延は、決して野球にとってプラスではない。海の向こうのMLBをコントロールすることは難しいが、少なくともNPBにおいては、ファンそしてプロを目指すアマチュア選手のためにも、「Unwritten Rules」にこだわらない常なる全力プレーをすべきである。

引用文献

- 1) 野球規則に無い“Unwritten Rules”。MLBに受け継がれる暗黙の掟とは？ 菊池慶剛 2013
<http://number.bunshun.jp/articles/-/151947>
- 2) 野球の不文律 2013 <http://ja.wikipedia.org>

参考文献

- 1) ポール・ディクソン著 水戸重之訳 (2010) メジャーリーグの書かれざるルール 朝日新聞出版
- 2) 水次祥子 メジャーの掟 (2002) 太陽出版
- 3) 四電衛 (2012) 19歳の大型新人を死球で歓迎するメジャーの掟 ～ブライス・ハーパーへの洗礼～
Number805 文藝春秋 SCORE CARD
- 4) 野球に暗黙の了解は不要 ～大リーグに広まる悪習は模倣すべきではない～ 犬山翔太 2013
<http://1st.geocities.jp/dogyamanet/index.html>